

B—75 被服製作（作図）における数理的考察について

郡山女大 関口 富佐
河島シヅエ
桑名 恒
○橋本 節子
原田 恭子
仁木マスミ

1. 本研究は、被服製作における製図作図上における free hand 部分の曖昧さの解決と作図上における数理解とを一つの問題点として、胴型製図上の前後衿ぐりにおける弧の性格を追求吟味し、技法における正確さを求めた第十二回日本家政学会東北・北海道支部会発表の第2報として、数理的思考を通して衣服造形美探求への手がかりとするものである。

2. 試料 (1) 胴型製図（文化式，胸囲84cm，以下A類という。）についての衿ぐりにおける円弧集団 $\Sigma r\theta$ $\pi/180$ 。(2) 胸囲の増減による衿ぐりの寸法および形状の変化による法則の吟味。(3) 本学短期大学部家政科一年生（18～19歳）身体計測における80例中2～3例（以下B類という。）による同上(1)，(2)についての吟味および検討。

3. 成果，2，試料 (2) における作図法においては，胸囲数値の変化にともなう法則的な変動は見られない。

したがって free hand における曖昧さを解決することが可能である。同上 (3) における計測数値においては、体型による身体各部の変形により法則を求めることは、正確な意味において不適である。ただし資料を増し、その身体諸相の基本的要因把握によっては可能となるろう。A類における割出し方式の意図する身体（胴型）の理想的プロポーションとB類における作図概念の相違を検討し、被服製作上における衣服美の造形理念の検討にいたる過程を数理的に解明しつつある。